

# 北斗句会

## 北斗句会 自薦三句 (令和元年)

～五十音順～

ふとこころ 石田 木よし  
ちちははの墓碑ふとこころに山眠る  
この堀をめぐる戦や花  
俘虜のごと残る白菜縛らるる

オンザロック 大崎 石州  
八重桜前のめりなる老い木かな  
早く打て蚊が尻立てる頬つぺかな  
温泉上がりのオンザロックや宵の秋

彼岸花 太田 黒幸風  
羅の似合ふ銀座の裏通り  
夕闇にかが火しめくや彼岸花  
炎昼に齒をくりいしばる地蔵尊

令和 大森 康正  
春風や余韻と帰る美術展  
諸人の祝ふ令和や五月月空  
加速して過ぎ去る日々や晦日蕎麦

猫の恋 川瀬 亮  
愛らしく鳴いては成さぬ猫の恋  
もう会へぬ人への想ひ賀状書く  
庭を掃く秋の深きを知る筈

雪鳥 竹内 雲泉  
雪鳥やこの日ひと日を生き延びる  
子はすこの日に孫もつ齢柏餅  
鳴けるだけでつくつく法師なき尽くせ

ポイントセチア 田中 資凡  
存念のポインセチアを玄関に  
乾門抜けて名残りのさくらかな  
鯨掴みて少年の白き脛

# 北斗句会

好日 好日 夕日 ごと 釣り 上ぐ 鱒の 連珠 かな  
好日 白や 炙り 出さる 磯の 波  
好日 や杖を 放ちて 青き 踏む

傘寿

速水紫州

風薫る 傘寿 と なりて 家族の 枕  
枇杷の実を むく や はる けき 友偲ぶ  
木枯らしと 共に 逝きたる

音色

深見十萬

三味線の 音色も ぐも 薄暑 かな  
冬の 月 遮る の の なり かり けり  
春めく や 茶席の 菓子 の 淡き 紅

返り花

藤田紀潮

身の丈に 生きて いる なり 吾亦 紅  
たまさかに 佳き こと ひとり 返り 花  
逆光の 礫と なりて 初雲 雀

地平線

宮下ひかる

雪来る か 一枚 着込 む 旅の 人  
川沿ひの 梅の 呼び 来る 盛り かな  
菜の花 や 地の 平線 ま で 黄い 一面

竜飛崎

森田光彦

冬銀河 白波 寄す る 竜飛 崎  
春寒 や 更地 と 富な りし 喫茶 店  
芝桜 遠く に 富士 の 嶺 白し

史書

吉岡誠山

秋の 風波の 調べを 選び け け  
三が日 史書の 紐解き せて 明日 思ふ  
待ち 人は 姿を 見せず 春の 雪

東京湾

山縣秀雄

霧深し 展望 台の 方位 盤  
夕映えの 東京湾 や 虫し ぐれ  
のどけし や 古刹の 廊下 音